

専修学校の部 最優秀賞

街並み

青山製図専門学校 建築設計デザイン科 二年

小林 由衣子

東京で、一人暮らしをするようになって早6年目。この間、私は多くの人に出会い、多くのことを学び、人生の目標を決めました。それは、私の生まれ育った街、長野の「街づくり」に関わることです。

大学在任中のこと、私は長野の修景計画に携わる一人の建築家を知りました。私が生まれ育った長野県を中心として活躍されてきた方です。小さい頃から大好きだった博物館もその方の設計でした。私が「建築」という道を志すようになったのは、その方の設計に感動し、驚かされ、憧れを抱くようになったからです。

大学卒業後、この思いを達成するために、青山製図専門学校に入学しました。早速、入学した年の夏休み、私は憧れていたその方の設計事務所にインターンシップ生として受け入れてもらうことができました。本格的に建築を学ぶようになって一年も経っていない私は、まだCADの使い方もままならない状態でしたが、事務所の方たちは私を快く受け入れてくださいました。案の定、図面や模型は思うように進みません。悔しさのあまり、帰り道に思わず涙がこぼれることもありました。それでも、憧れの事務所の仕事を間近で見られること

はとても嬉しく、次の日にはまた笑顔で事務所に向かっていました。インターンシップ生として働きながら、「この事務所です長さんや所員の方に教わりながら、私も長野の修景計画に関わっていきたい。ここでしかできないことが絶対ある」と強く感じていました。

二年生が近づいた春休み、大学生は就職活動真っ只中の時期です。私は一般企業の就職活動をするべきか、これまでお世話になった設計事務所を狙うべきかで、思い悩んでいました。自分の「理想」と、実際の生活や経済面といった「現実」は食い違う…と、この時期初めて思い知らされました。

最終的に、私は就職活動することを決意しました。自立した生活が出来ることが、第一だと考えたからです。就職活動を始めてから、およそ三ヶ月後、私は長野にある鉄骨会社の設計職として内定を頂きました。当時は憧れの設計事務所には入れない、街づくりにも携われなさと悲観的になっていました。内定を頂いた会社に入社すれば、大きな建物にも携わることができ、知識と技術は深めることができます。その会社でも夢を持つことはできます。しかし、私が理想とする形とは違い受け入れられずにいました。

しばらくの間、私は自分の気持ちに整理が付かず、悩んでいました。悩みながら、長野のいろいろな街を歩いてみました。小布施は勿論のこと、須坂や松本にも行きました。そこは古い街並みです。しかし、古いままではありません。改修もされているし、そこに住んでいる人の手による、新しい生活の匂いもあります。そういったものの全部が混ざって、雰囲気のあるいい「街並み」が作り出されているように感じまし

た。

私が見た街で生活している人たちは、「昔からの建物」に「新しいもの」を加えながら懐深く生活をしていました。それを見ているうちに、自分でも以前からの「夢」に「現実」を加えてもいいと思えるようになりました。たとえ現実が混ざること、夢の形が変わったとしても、自分の本当の目的を見失うことがなければ、それでいいのだと。さらに、「街づくり」は、単に建物の設計だけではないことにも気付かされました。「街並み」とは建物の外観だけが造っているのではなく、その街での人々の「暮らし」が大きく影響しているのです。私は、街に暮らすことと自分が街づくりに大きく関わっていることを理解しました。

今、私は来年からの長野の暮らしが、少しでも長野の「街づくり」に影響を与えるものになりたいと考えるようになりました。そのために、鉄骨設計の仕事での努力は言うまでもなく、さまざまな人に出会ったり、自分の教養を深めたりすることで、自分の人間性を高めていきたいと考えています。その上で、街づくりのワークショップなどに参加するなどして、「人間性の豊かさ」からアプローチするような「街づくり」を模索していきたいと思っています。いつか東京の友達が、長野に遊びに来たとき、「いい街だね」と言ってくれること夢見て…。



専修学校の部 優秀賞

働くことの大変さ

東京エアトラベル・ホテル専門学校 国際ホテル科 二年

石川 彩華

私は、三ヶ月間のホテル研修を通して働くことの大変さを知りました。

昨年六月から、私は三ヶ月間、Tホテルのバーラウンジ・アクアで研修をしました。研修をする以前に接客業といったアルバイトをしたことがなかったので、その大変さを知らず、私の中にあつたのは「楽しみ」という感情だけでした。研修生だからそこまで辛くはないだろう、という気持ちもあつたのかもしれない。しかし、そんな考えは研修初日から崩れ去りました。

まず、私は社員の人から身だしなみの駄目出しを受けました。そして、歩き方、話し方、表情、全てにおいて注意を受けました。自分の中では良いと思っていたことが、実際社会に出ると通用しないという厳しさを初日にして思い知ったのです。次の日から、仕事を教わりながら実際に表でランナー作業をし、ホテルで働く大変さ、そして想像していたものと全く違うギャップに驚きながらも、スタッフの人に邪魔者扱いされないようにと自分なりに頑張りました。

私が、一番大変だと感じたのはコミュニケーションです。特に、厨房を担当するシェフの人達との人間関係は、初めの

うちはあまり良好ではありませんでした。挨拶をしても無視されたり、にらまれるだけでした。返事はありませんでした。毎日続くと、だんだん厨房へ行くのが苦痛に感じ、ストレスになりました。このまま関係が悪いまま、逃げてしまつては負けのような気がして、絶対挨拶に対して挨拶を返してもらおうと決心しました。出勤時は必ず厨房から入り、シェフ一人一人に挨拶して回りました。そして、一ヶ月程過ぎた頃にいつも返事のない厨房から「おはよう」と返ってきたのです。たった一言だったのに、私は凄く嬉しくて、洗面所で手を洗いながら「やった。勝った。」と大喜びしました。その日を境に、たくさんの社員の人たちに「最近笑顔がすごく良くなつたね」「何か楽しそうだけと良いことあった。」などと言われました。皆一者に言いだすので、皆で事前に相談していたのではないかと疑うくらいでした。やはり人間の表情というのは、悩みがあると良い顔にならないのだと実感しました。ましてや、接客業という業種は、笑顔であることが当たり前です。たとえ、自分が体調の悪い日、嫌なことがあつた日であっても、お客様を不快にさせるような態度であつてはいけません。その大切さと大変さをこの研修を通して学ぶことができました。

しかし、ただ笑顔であることだけでは良い接客とは言えません。一ヶ月が過ぎた頃、私は「あなたの接客は、サービスの十パーセントの価値がない。」と社員の人から厳しい言葉を受けました。「常に自分の行ったサービスを自分がされたらどう感じるのかを考えながらサービスをしなさい。」とアドバイスをされました。人と人が関わる仕事というのは相手を主

役にしてこそ、良いものが出来るのだと思いました。

二ヶ月が過ぎ、私は研修バッチをはずすようにと言われました。戸惑う私に「お前にはもう必要ないだろ。」と笑顔で言われた時、私は、認められたと感じとても嬉しくなりました。しかしながら、毎日注意は続きました。社会へ出るこの大変さを学びつつ、残り一ヶ月の研修期間を過ごしました。

研修最後の日、ある人に「お金を稼ぐって大変なことでしょう」と言われました。私が今、何不自由なく生活出来ているのは、親が毎日一生懸命働いているからなのだと思ひ知りました。そして、親が働いて得たお金は、自分のためではなく家族のために使われています。その親の偉大さに気付き、改めて感謝をしました。

学生に戻り、毎日電車の中で様々な社会人を目にします。研修に行く前は、何故スーツを着た人はこんなに眠たそうで疲れ切った顔をしているのか不思議でした。しかし、三ヶ月の研修を終えた今、少なからず社会に出る大変さを学んだので理解できるようになりました。それでも私は、将来社会人になった時、その眠そうで疲れた顔をした中の一人になるのではなく、心に余裕を持たせ、常に笑顔でいられる社会人になりたいと思っています。



二つのやり方、二つのやりがい

東京エアトラベル・ホテル専門学校 国際ホテル科 二年

須崎竜伍

ホテルと居酒屋で働いた結果、サービスとは人を楽しませることだとわかった。

私が体験したホテルのレストランのサービスと居酒屋のサービスには「人を喜ばせたい」という共通点がある。ホテルは言葉遣い、身だしなみなどがきちりしているのに対し、居酒屋は少しくだけているようなイメージがある。しかしお客様を喜ばせたい、満足して帰って頂きたいという気持ちはどちらも一緒だと思う。

私は昨年三ヶ月間、都内にあるホテルのレストランで研修を経験した。まずビックリしたことは従業員の人の動きにそつがなく、キビキビとしていることだった。そしてブロックというエリアごとに分かれて、各自の役割が決められていた。オーダーを取る人、ドリンクを提供する人、お皿を下げる人、コーヒーやお茶のおかわりを回る人、各自が自分の仕事をこなすことにより、全体が円滑に動き、お客様から見に行き届いたサービスにつながっていた。ホテルのサービスの良いところはタイミング良くドリンクのおかわりに来てくれるところや、重厚感な空間の中でゆったりと時間が流れること、そして何より従業員の気遣いだ。メニューで迷っているような

顔つきのお客様がいれば、「何か、お伺いいたしましたでしょうか。」と声をかける。それが従業員とお客様との信頼関係にも結びつくのである。私は思う。ホテルは来て頂いたお客様に一流のサービスと空間を提供し、満足して帰って頂くことを行っている。人生の中でほんの短い時間かもしれないが、忘れることの出来ない時間にして頂く。

次に居酒屋のサービスだ。居酒屋と聞いてイメージすることは元気、厚い人情だ。私がアルバイトをしている店では先日、スピリッツマニユアルを作成した。私達の店ミッシュンには「本来の黒豚の美味しさと人の温かさを提供する」ということだ。実際、様々な黒豚の部位を使っている。定番の他に毎日一品新しい料理が出される。お客様にも新しい味を知ってもらいたいからだ。サービス面でいえば、まず大きな声で声をそろえて「いらっしやいませ」の一言と一札をしている。当たり前なことかもしれないが、全員に声をそろえて言われると嬉しいと思う。次に料理提供トークがある。皿は熱くする、熱いうちに食べてもらいたい料理であるといったこと、よく混ぜてもらいたいといったことを知らせる。私達従業員は美味しい食べ方を知っているがお客様は知らない。私は提供時に「〇〇の美味しい食べ方を教えてください」と言っている。美味しい食べ方というところにお客様も興味を持ってくれる。私が知っているその料理の一番美味しい食べ方をお客様にも知って欲しいと思う。他にも女性のお客様がお手洗いが落ちた音がしたら、さりげなくおしぼりを持って行く。箸どももある。心がけていることは、自分がお客となったときに

されて嬉しいことをお客様にしてあげることだ。居酒屋としても、来て頂いたお客様に仲間との最高の時間を提供する。そのためには全席に気を配り、お客様がして欲しいことを見抜き、先にしてさしあげる。そしてユーモアを持って接する。やはりホテルのレストランを利用する人、居酒屋を利用する人の客層や目的は違うだろうし、居酒屋のような感じでホテルのレストランでは働けないとも思う。逆にホテルのレストランのウェイターのような感じで居酒屋のホールに立っていてもおかしい。

両方にまだまだ違うものはある。しかし、両方に共通していることはお客様を喜ばせたい、楽しませたいということだ。私は、これからも両方の良さをもっともっと見つけていきたいと思っている。ファーストトークでお客様の大切な時間のスタートを盛り上げたい。よりスマートなサービスを身に付けお客様に最高の時間と空間を提供したい。そして将来はサービスマンとして、周りに人の集まる人間になりたいと思っている。

やる気の大切さ

東京エアトラベル・ホテル専門学校 国際ホテル科 二年

田 中 綾 乃

私は三ヶ月間のホテルでの研修で、やる気と熱意が大切であるということを学びました。

私の通う専門学校では、一年生の時に三ヶ月間ホテルに研

修に行き、実際の仕事を体験することが出来ます。私もその制度を利用し、ホテルの会員制バーラウンジで三ヶ月間研修をしました。そこでの主な仕事はウェイターでした。お客様からの注文を受け、それをサービスします。私はほとんどが早番だったので、お店を開ける準備もしました。お店を開ける前の準備では、バーの手すりやドアノブの金属を磨くこと、ナイフやフォーク等のシルバー類、グラス等の汚れを残さないようにすることでした。初めの一ヶ月はどのような順番で作業をしたら良いのかわからず、オープンまでに準備が終わらないことがよくありました。仕事が早く終わらないことに私自身が苛立っていました。ある日、上司に、「なんでオープンまでに仕事が終わらないのか」と指摘され、もっと悔しい気持ちとなりました。その上司の言葉は、逆に私を奮い立たせました。「明日は絶対に終わらせる」と自分に活を入れることが出来たのです。次の日から、どのようにしたら効率良く出来るかを自分なりに研究し、仕事の順番を変えてみました。その結果、オープンまでに準備を終わらせることが出来るようになりました。また上司には、「前と違って顔にやる気を感じられるね。」ともいわれました。やる気や熱意は表情で伝わるものだと実感しました。

三ヶ月間の研修が終わる頃、上司に「よかったら、これからもアルバイトを続けてほしい。」と言われました。私は三ヶ月間の頑張りが認められたのだと感じ、とても嬉しくなりました。もし仕事がわからなかったり、何をしたら良いかわからなかったとしても、まずは自分なりに考えてみる事が大切だと気付きました。また、やる気次第でどうにでもなる

ということも学びました。

私の研修先は、会員制ということもあり、一日に来るお客様の数は限られています。特に日曜日は一人しか来ないということもありました。初めの頃は退屈な思いをしたことがあります。しかし、そんな暇な中でも、何かやる事を見つければいくらでも出来ることがあります。例えば、部屋中のガラスや鏡を磨きます。またカクテルやワインについての勉強などもしました。確かに仕事やアルバイトをしていると暇なことはあると思います。しかし、暇だから何もしないということではなく、自分からやる気を出し、新しい仕事を見つければよいのです。この研修を通して、私は何事も大切なのはやる気と真剣に取り組む気持ちだとわかりました。その気持ちがあれば、私にも出来ることがたくさんあると気付き自信を持つことが出来ました。

私は化粧品販売の会社に内定し、来年の四月から美容部員として働きます。働く場所はホテルではありませんが、お客様と接するという点ではホテルと同じことです。ホテルでの三ヶ月間の研修は活かされると思います。美容部員の仕事はおお客様の悩みを解決するためにアドバイスをします。専門的な知識を身に付けなければなりません。時には挫折することもあると思います。そんな時も、私はやる気と真剣に取り組む気持ち、また自分なりに考える、ということを忘れずに挑戦し続けます。

三ヶ月間で学んだやる気の大切さ。また、三ヶ月間で得たやる気があれば何でも出来るという自信を持ち続け、自分自身の成長につなげていけると思います。

不可能を可能へ

ホスピタリティーツーリズム専門学校 旅行学科 二年

北 爪 希代子

私が「トラベルヘルパー」の職業を目指す理由は、人と人との結びつきに関わりたいたったからです。トラベルヘルパーとは介護技術の基本を身につけ、かつ旅行に精通した人材の事を表しています。

私の祖母は寝たきりの生活で、外に出掛けるには車椅子が必須でした。家族が「桜が綺麗だから見に行きましょう」と言っても祖母は「車椅子だから外に出たくない。恥ずかしいじゃない。」と言って断るのが常でした。母や父は「とても綺麗だから絶対おばあちゃんに見せたいね」と言って、祖母を説得し、濃い紫の素敵なブランケットで車椅子が見えないように包み、皇居へ桜を見に連れて行ったのです。私は、その時一緒に行けなかったのですが、祖母達の帰路と私の帰路が偶然重なって見えた、その時の祖母の笑顔が本当に嬉しいうで「桜が満開に咲いていてね、とても綺麗だったのよ。ほら、このブランケットで寒くないしね」と興奮冷めやらぬ状態で話してくれました。恥ずかしさを感じないようにと考えた包んだブランケットでしたが、満開の桜を見た祖母は恥ずかしさよりも、寒さの方が重要になったようでした。私だっただけでなく、祖母にとっても旅行のようでも行けるような場所ですが、祖母にとっては小旅行のような感覚で、部屋のベッドで横になっている時と比べものにならない程、生き生きとした表情をしていた事を覚

えています。

日本では高齢化が進み、例えば駅でのバリアフリー対応として、スロープやリフトを付けたり、駅員が介護サービスの資格を獲得したりと高齢者の需要が高くなっている事が分かります。しかし、ホスピタリティツアーリズム専門学校の夜間研修制度で旅行会社のカウンターで研修をしていた時には、高齢者の為のツアーや車椅子の方のツアーは見た事がないと言っても過言ではありません。勿論、障害者のお客様やお年寄りのお客様は専門的な知識が多少なりとも必要な分、ツアーを組むのは難しいのかもしれませんが、それでも、私は健常者も同じように、普段いつも見ているような景色や仕事という日常から、旅行を通していつもの場所から離れる事により、リラックスが出来たり、普段の生活では見られない新しいものに遭遇し感動したり、何の変哲も無い地元の景色が愛しく感じる事ができるのではないかと思います。また、そのような体験をする事によって、自分の周りの環境の良さが改めて分かったり、楽しかった、素晴らしかったという気持ちによって作られる笑顔というものは、生活のエッセンスの一つになるのではないかと思います。

留学中のボランティアで、おじいさんとおばあさんと一緒に教会に行つて、ランチをとるという日程の時に同行させて頂きました。車に乗っている時から彼らはとても嬉しそうで「連れて行ってもらえるなんて本当にありがたいわ。」と言つて私の手を何度も強く握るのでした。教会に着いてからは、それぞれのテーブルに座っていただけで、立食パーティーのような形式だったので、足が不自由な方には、私が食べ物を

お皿にとって席まで運んだり、お薬が必要な方には水を用意しました。この時に決まっておじいさんとおばあさんの口から出る言葉は「ありがとう」です。ちよつとした事でも言っていただけなので、何度この言葉を耳にしたか分かりませんが、この言葉を聞くと喜んで貰つて嬉しいと心の底から思えますし、私自身、もつと人への感謝の気持ちが必要だと気が付かされます。この留学中の体験は私にとって衝撃的でした。自分が当たり前だと思つていたことが、人によっては当たり前ではないということ、普段何気なくしている動作でも人を喜ばすことが出来る事、感謝の気持ちを伝えるとお互いに素直で幸せな気持ちになれる事が分かりました。

このような訳で、おじいさん、おばあさんから「素敵な笑顔をありがとう。」という言葉頂き、自分自身も感謝の気持ちを持てる人と人との結びつきは、私にとってかけがえのないものです。そして、私の祖母や留学中のボランティアで会いたおじいさん、おばあさんのように不可能だと思つていた小旅行を「可能な旅行」にする事によって、家族での思い出が増え、日々の生活に少しでも潤いができるのではないかと考えています。この気持ちを大切にしながら、トラベルヘルパーという仕事をしたと思っています。

最後にボランティアでお会いしたおじいさん、おばあさんと、ボランティアを薦めてくださった学校の先生、そして家族にも心から感謝をしたいと思ひます。